



139号
2008/12/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「挑滑車」で悲運の武将・高寵を演ずる張紹成さん 身体は一回りしても顔にブレはない。 撮影：井田裕明

‘わんりい’139号の主な目次

北京雑感その(30)「北京の喫茶店」.....	2
私の調べた四字熟語(28)「論功行賞」.....	3
鉄道で行く大興安嶺森林の旅(2).....	4
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より.....	5
媛媛講故事(9)「龍の九匹の息子たちⅡ」.....	6
四姑娘山・写真便り(14)「密林の王者・タイガー」.....	7
スリランカ紹介(24)「TANK(貯水池)」.....	8
大連便り・日本語教師雑記(9).....	9
私の四川省 一人旅(20) 垂丁Ⅶ.....	10
中国・東北三省の旅(1)朱蒙が築いた天然の要塞.....	12
中国を読む(57)「フォトジャーナリストの眼」.....	13
「長江之歌」の歌詞.....	13
‘わんりい’【活動報告】黒酢料理交流会.....	14
‘わんりい’【活動報告】夢広場と市民大学・公開講座.....	15
‘わんりい’掲示板(「京劇わくわく講座」の見所).....	16

♪♪「中国語で歌おう!会」・11月の歌 ♪♪

「長江之歌」(歌詞 p13)

*CCTVが、83年に放映したドキュメンタリー『話説長江(長江を語る)』の主題歌

於：まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩 2 分、
小田急線南口徒歩 5 分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

12月19日(金) 19:00～20:30

指導：趙鳳英 (中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

●「中国で歌おう!会」 於：まちだ中央公民館
毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)
19:00～20:30 会費(月1回):1,500円

体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局へお問合せ下さい。



最近北京へ行った方に伺いましたら、前門大街はまだ工事が完成していないそうです。

昨春秋、帰国前に見に行った時は、既存の建物を壊して地面を掘り返したところまでで、工事の囲いの向こうには何も見えませんでしたから、オリンピックまでに街並みを完成させるのは無理だと感じました。それでも3年前に、前門大街の西側、地下鉄大柵欄出口を西へ出たところ一面が取り壊され、多摩丘陵の宅地造成のように、或いはそれ以上に著しく掘り返されていたのに、2年前にはすっかりきれいに整備されていたのを目の当りにし、また他でも驚くべきスピード工事の実例を見聞していたので、北京式工事なら何とかなるのかと心の隅で思っていました。前門の改修はやっぱり、オリンピックに間に合わなかったようです。でも、遅かれ早かれ前門が王府井のように面白味のない街になるのは確実でしょう。残念です。

6、7年前のことですが、北京のお土産に美味しいお酒を買いたいと思って北京の古老にたずねたところ、王府井の一本東の大通り、東単大街を北へ行ったところの酒屋さんを教えられました。そのお店は、歩道から30cm程も高くなっていて、更に20cmくらいの敷居を跨いで入るようになっていました。敷居を跨ぐと、百年もタイムスリップしたような古風な雰囲気、魯迅の『孔乙己』の世界に迷い込んだような感じでした。

中はたたきで薄暗く、黒光りするテーブルがあって、映画で見る居酒屋のようです。片側にカウンターがあって、奥の棚にお酒を並べて売っていました。このお店には私が思い描く古い北京があるようで、何故か懐かしく、好ましいものを感じました。お酒が好きなら、毎日でも通いたいお店でした。

それから二年ほどして、またお酒を買いたくてもう一度行ってみましたが、あのお店はなくなり、通り全体が、歩道からそのまま入れるように段差はなくなり、以前とはまるで違う、明るいお店が並んでいました。王府井と同じようなつまらない街並みになっていました。

北京の伝統ある街並みが、画一的な大通りに変わってしまうのは本当に残念ですが、新しい北京で一つだけ嬉しいことがあります。

それは、北京の街に、独りで歩いていて、疲れた時にちょっと休める店が増えたことです。私が北京に行き始めた頃、麦丹勞(マクドナルド)や肯德基(ケンタッキーフライドチキン)などが出来始めたので利用できると喜びましたが、何時も混んでいて、ゆっくり休むことは出来

ませんでした。

その他ですと、昔ながらの茶芸館と言う喫茶店のようなのがありますが、これは我々が考える喫茶店とは違って、店の中には坪庭や池が設えてあり、昔から北京の人たちが商談などに使う高級な貸席のようなもので、初回の席料は独り60元程、100g600元とか800元の茶葉をキープします。次回からは茶葉がある限り、一人30元ほどの席料だけで利用出来る仕組みです。

勿論時間制限はありませんが、ちょっと高級すぎて気軽には使えません。独りでの食事なら、小吃xiǎochīと言う昔ながらの食堂がありますけれど、ゆっくり一休みと言うのには向いていません。そんな訳で、当時は、街を歩いてもちょっと一休みと言うような場所が無くて、北京で何かビジネスを始めるなら、絶対喫茶店が良いと思ったものでした。

それが4、5年前から、若者向けにソフトドリンクを出す喫茶店のような店がぼちぼち出来始めました。店の中で、天井から吊るしたブランコが座席になって、若いカップルが並んで座って揺られながら、御代わり自由のソフトドリンクを楽しんでいました。そこで出されるドリンク類の味が今一だったせいか、長続きするお店は少なく、すぐ廃れていきました。

代りに、新しい街並みに出始めたのが、スターバックスのチェーン店です。故宮の中にまで出来たのには驚きました。(尤も、故宮の中の店は、暫くして禁止されたようですが。)すると似たようなお店が増え、ケーキや軽食も出すようになりました。また、日本式ラーメンや回転すしのお店も出来たりして、独りで気楽に入れるお店が競い合うようになりました。これで、私のビジネスチャンスは無くなりましたけれど、一人歩きの時、食事や休憩の場所に困らなくなりました。

北京の一般的レストランで、少人数が食事をするのは大変です。ご存知のように中華料理は一皿が大きくて、1品でも食べるのは難しいのに、やはり2、3種の料理は食べたいし、スープも飲みたいとなると、いくらお持ち帰り(打包)が出来るといっても二の足を踏みます。それで、以前は、外での食事は極力避けて、空き腹を抱えて帰宅したものでしたが、今では食事も、休憩も、待ち合わせの時間潰しも、気軽に出来るようになりました。

古い北京が好きと言いながら、新しい北京の便利さを楽しむ自分を後ろめたく思いながらも、街歩きが気軽に出来るようになったことを単純に喜んでいるのが今の私です。

論功行賞

（ろんこうぎょうしょう）

三澤 統

【私が調べた四字熟語】

28

国会で首相が変わり、新内閣が組閣された時に、「今度の内閣の大臣の顔ぶれを見ると、論功行賞的な色彩が濃いようだ。」などと言われます。

総裁選びの折に功勞の有った者が大臣に採用されたのではないかと言っているのでしょう。そのほかにも私たちは結構日常的に「論功行賞」という言葉を耳にしたり、使ったりしています。

では辞書を調べてみましょう。

三省堂 現代国語辞典では、「てがらの有無・大小に応じて賞をあたえること」

小学館 中日辞典では、「lùn gōng xíng 論功行

shàng 賞〔成〕論功行賞、功績に応じて褒章を与える」となっています。日中ともに全く同じ意味です。

この成語の出自は、〈史記¹⁾・蕭相国世家〉の以下の部分です。

“漢五年、即滅項羽、定天下、論功行封”

（漢五年、既に項羽を滅ぼし、天下が定まって、功績に応じて褒章を与えた）

紀元前202年、劉邦は「漢楚の戦い」²⁾で最終的に項羽を打ち負かし、天下を統一しました。彼は、皇帝に即位し、西漢政權を打ち立て、歴史上有名な漢の高祖となりました。

劉邦は帝位につくと、臣下たちが戦場では多くの血を浴び、戦後もまじめにこつこつと倦まず弛まず励み、西漢政權樹立のために、大きな功績があったことに思いを馳せました。

そこで、劉邦は諸大臣の功績の多寡を評定し、その結果で官位と賞与を与えることにしました。

劉邦は蕭何の功勞が最も大きいと思い、彼を為贅候に任じるとともに最も多くの褒賞を与えました。けれども群臣たちは、口々に「平陽候の曹參は、戦いで城を攻め、敵の土地を奪い、その折には全身に70箇所以上もの刀傷を受けたのですよ。その彼の功勞を最大とすべきです」と言って納得しませんでした。

この時、関内候の鄂千秋が劉邦の心の内を察して、次のように言いました。

「あなたがたの主張は間違っている。曹參はたしかに各地で戦い、土地を奪い取った。それらの功は勿論大きいですが、これは一時的な事だ。劉邦は項羽の大

群と五年も対峙し、その間の軍隊の損失も多かった。時には自分自身がたった一人で逃げたことも一度ならずだった。しかしそれでも蕭何は常に軍隊を派遣して、前線を補充したのです。蕭何は劉邦の命令によってではなく、自分の考えで行動したのです。また漢楚両軍が滎陽で対峙し、食料が不足した折にも、彼は船で食料を運んで来たのです。

蕭何が居なかったら、今日の西漢王朝は無かったでしょう。曹參の一時的な手柄が、蕭何の長年の手柄を凌ぐようなことがあってはなりません。したがって蕭何の功績を第一位にすべきです」

劉邦は、正に鄂千秋がいうように自分は蕭何を評価したのだと、並びいる群臣達に伝え、最終評定で蕭何の功績が第一位であるとししました。そして群臣たちも皆その評定に心から承服したのです。

〈注記〉

1)『史記』中国前漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された中国の歴史書である。正史の第一に数えられる。二十四史の一つ。

2)『漢楚戦争』中国で紀元前206年～紀元前202年の約5年間にわたり、秦王朝滅亡後の政權をめぐり、西楚の霸王項羽と漢王劉邦との間で、当時の中国のほぼ全土で繰り広げられた内戦。「項羽と劉邦の戦い」とも呼ばれる。

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より

‘わんりい’のおたより会員へのお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し、文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100（事務局）

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面が16pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

私の父は私が生まれて6ヶ月の時に出征して行った。私は戦争のことは全く覚えていない。漸やく二歳半になった時、父は無事に帰って来たのである。その後、父と一緒に寝かせても、父と一緒に風呂に入れても、いつも背中をむけて馴染まない子供であったらしい。「父はきっと淋しい想いをしていたに違いない」と、子供を持つようになってからそう思った。そして満州へ行っていたと聞かされ、何も話してくれなかった父に今頃になって親しみが湧く。

今回の旅ではどうしても添乗員の李先生について話しておき度い。1933年に朝鮮で生まれ、その後延吉で育った先生は、長い列車の旅の途中で自分の生い立ちを淡々と話してくれた。戦争の悲惨さを実感してない私にとってそれは驚くことばかりであった。

『1939年延吉の小学校へ入学する時に、突然日本軍の命令で「平木宗助」という名前が付けられて日本の戸籍になり、学校では全て日本語の教科書で授業、日本語以外は喋ることもできなくなった。

授業の前には毎朝、『皇国臣民の誓い』を唱和し、日本の皇居と長春の満州国皇帝の方角に頭を下げてから始めた。そして1945年の終戦まで6年間は、厳しい日本軍の統制の下での生活を余儀無くされた。

日本の敗戦と共に朝鮮族に戻ったものの短期間であったがロシア軍が入り、ロシア語の教科書で勉強したが、ようやく1949年中華人民共和国が成立し、中国人として中国語を学ぶようになった。現在では朝鮮族として少数民族の保護下にある』等等。

ハルビンから列車で四時間半、牡丹江に到着した。車内は夏休みの為か若者が多い。現在の中国の大学生は日本人と同じくお洒落で誠に勉強熱心である。可愛い娘さんと片言の中国語で話していると、隣席の老人が大きな鞆を網棚からおろし、中から20cm程に育った亀を二匹取り出して見せてくれた。真黒に日焼けしたその老人は得意気に満面の笑みで「ハルビンで買って来たものである」と説明した。これは趣味で牡丹江の家では数十匹の亀を育てていると言う。平和な楽しみのひとつであると納得した。

牡丹江の街は静かな佇まいであった。薄暗くなって到着、翌朝早めの出発であった為にあまり見物もできなかったが、日本軍の建てた神社は面影もなく、その場所に大きなホテルが建設されるというので基礎工事が進んでいた。寒さに強いとされる枝垂れ柳の街路樹が続く。

郊外は豊かな田園地帯が広がっている。特に西瓜の真盛り、次々に満載の西瓜トラックが通過する。又黒龍江省のお米は中国で最も美味しいと言われるが、その通りであり野菜も豊富であった。現在の真に平穏な生活を垣

間見た気がする。

暁闇の窓の隙間に聴く霧笛
激戦を潜めて目眩く夏日
沿道の赤きサルビア死者の血か
肥沃なる畑地や今日の大豆畑

しばらくバスで走り「火口林・鏡白湖」を見学。ここは避暑地として有名な場所で中国の人達もたくさん来ている。自然保護というわけで日本の上高地の如く車を外で乗り換えて入場する。日本人は私達だけらしい。

深淵を覗く階汗拭ふ
暑苦し土地の女の喧しさ
木洩れ日や原生林の月見草

午後から渤海国の遺跡を訪ねた。8～10世紀に栄えたこの国は727年以来日本との通交があったという。唐の文化を模倣して中国東北地方の一大国であったらしい。現在は一面の稲田の中に壘壁が残っているのみであるが、近いうちに3つの村落を移転させて発掘調査が始まるという。

日本との文化交流の証が出土するか楽しみである。博物館や壘上の礎石には赤とんぼが群れていた。近くの東京城駅から列車に乗り込む。東京城には日本軍の飛行場や日本人学校の跡地もあって、戦争中はたくさんの兵隊が駐屯していた所である。この辺りからハングルの文字がたくさん目に留る。

図們に到着。

ゆだち後の星空仰ぐ図們駅
夏の夜半暗きネオンの淋し街

翌朝図們大厦より、北朝鮮との国境へ行く。八時半の為まだ衛兵は誰もいない。

身の丈の雑草繁る国境
露草や入るを許さぬ図們江
脱国もさぞやと思う夏の河

途中いくつかの鎮を通り過ぎ長白山へ向う。どこまでも続くもろこし畑や落花生畑、沿道には菊いもの黄色とナナカマドの白い花が彩どり、青空に浮かぶ雲が眩しい。途中からジープに乗り一気に長白山の頂上へ到着したが、楽しみにしていた天池は深い霧の中で見ることができなかった。残念！。名も知らぬ高山植物が咲き満てるばかり。

天涯にひとすぢの滝神々し

長時間バスに揺られて延吉に戻ったのであるが途中真暗闇の中、満天の遠ち近ちに稲光が妖しく光り地球の自然



中国と北朝鮮を結ぶ国境の橋。橋げたの色が真ん中で色分けされている

現象に圧倒されつつ、その中の自分の存在に戦くほどであった。

李先生の故郷、延吉である。まだ先生の実家も残っているし兄弟や甥、姪もたくさん住んでいるという。心なしか嬉しそうであった。

延吉は医学の街であった。医学の大学、薬学の大学、街にはたくさんの病院や薬店もある。通りの看板は、どれもハングルと漢字と両方が並んで書いてある。みやげ物店へ入るとまるで韓国にいるように錯覚する。午前中は李先生の案内で西市場の中を歩いた。珍しい食べ物ばかりで、現地の人達が買い求める食材も山盛りに安く売っている。もう立派な‘松茸’が沢山出ていた。木耳や鬼灯の乾燥したもの、又、唐辛子等の香辛料、衣類等々見て歩くのも楽しい。薬店では各人色々な薬類を買い込んだ。私も主人にカプセルの栄養剤を求めたが、結局これらはすべて延吉から大連へ飛ぶ飛行機の荷物検査で‘没収’されてしまった。オリンピックの為に検査が厳しい。後の祭であった。



朝鮮族・民族村

午後からは朝鮮族の民俗村へ行く。ここは観光客の為に歌や踊りを見せてくれる。又、村内は建物や風俗習慣を紹介するようにできていて、これら全般を守っているお爺さんとお婆さんが実に優しい笑顔で迎えてくれた。日本語も少し話すので私達が入ると大変嬉しそうであった。すでに80歳を超えているらしい。やはり幼い時に日本軍に教わったのかも知れない。

延吉を離れる時には李先生の身内も見送りに来てくれて、私達の気持も和んだのである。

旅も終りに近くなった。延吉から大連に戻り私は一日中、友人の羅麗傑女史とゆっくり過したが他の人達は、旅順、二百三高地、水師營方面を見物したという。

合歡の花大連の街咽せるがに

(その2 終わり)

「季語研究会会報」11月号より転載

松本杏花さんの俳句

紅風湖の日中同船初紅葉

hóng fēng hú rú jiàn
紅風湖如鑑
rì rén huá réntóngyī chuán
日人華人同一船
fēng yè hóng chū rǎn
枫叶紅初染

季語：枫叶，秋

赏析：此首及以下七首为作者赴安顺，贵阳旅游是所作。

以前到中国旅游，都是乘坐旅游团队专车，这次能同中国普通民众同乘一船，增加了直接交流的机会，作者煞是欢喜。在那清平如镜的湖面上，倒映出层林尽染的枫红，构成一幅五彩斑斓的秋景图。

可以想象，船上肯定是一片欢声笑语。

「余情残心」より

秋霖や魚釣る影の二つ三つ

qiū lín xì méngméng
秋霖細蒙蒙
shuǐ biān chuí diào xiǎn gū líng
水边垂钓显孤冷
yī xī liǎng sān yǐng
依稀两三影

季語：秋霖，秋。

赏析：这时一幅意境深邃的水墨画。秋霖纷纷，水田一色，依稀可见两三钓者，渲染出了肃杀暮秋的清冷。此句将山涧秋景描写的淋漓尽致，令读者有亲临其境之感，给人一种美的享受，堪称佳句。

龍の九匹の息子はもともとは天界の神々でしたが、どうして人間の世界に下りてきたのかについては、次のような話があります。

明代初期、天下は戦乱が続き庶民たちは苦しんでいました。龍の息子たちはそれぞれ変幻自在の通力と優れた能力があるので、天帝は彼らを人間の世界に遣わし、君主を助けて天下を安定させ、庶民を幸福にする働きをさせました。明の山河を築き世の中が落ち着いたら、龍の息子たちは天に帰りたいと願いました。しかし、明の君主になった朱元璋は彼らを自分のもとに残したらどれほど役に立つかと考え、彼らが天界へ戻ることを阻止しました。龍の息子たちは怒りのあまり暴風雨を起し、大暴れしました。朱元璋は策をめぐらしました。

ある日、朱元璋は一番目の息子・鼯鼠(びし)に大きな石碑を指して「あなたはとても力があるが、祖先の功德を刻んだこの石碑を持ち上げたら帰ることを許そう」と言い

ました。

鼯鼠が見るととても小さな石碑に見えたので、何も言わずに自分の背に乗せてしまいました。しかし、思いもよらないことにどうしても持ち上げられません。実はこの石碑には「真竜天子」のさまざまな功德が刻んであり、歴代の帝王の御印もあり、あらゆる世界の神や鬼をも抑え鎮めるといっても重い、神の神聖な石碑だったのです。

長子である龍の息子が天界に戻ることができそうもないのを、他の八人の息子たちは見、兄である鼯鼠の傍を離れがたく永遠に人間界に残ることを決めると同時に、以後は真の姿を現さないとい固く誓いました。

朱元璋は九人の龍の息子を人間界に引き止めましたが、結果として得たのは石の姿をした神獣だけでした。深く後悔し、建国のために功績を挙げた龍の息子たちの姿をいつでも人々の目に触れるようにしたいと思い、それぞれの息子に一つの務めを与え、千古に伝えることにしました。



お寺の屋根に勢揃いした龍の息子たち

中国旅行で出会う龍の息子たち (わりい'138号を参照ください)

※鼯鼠(びし)、椒圖(しょうず)、蒲牢(ほうろ)の図は138号に掲載



戦いを好む睚眦(がいし)



青銅器に描かれる饕餮(とうてつ)



狻猊(さんげい)。仏像の台座や香炉の足によく見られる



音楽を愛する囚牛(しゅうぎゅう)



建物を火から守る螭吻(りふん)



人間の行いの是非を糺す狻猊(へいかん)

■ タイガーを待つ

デカン高原の真ん中に在る密林の中でジープを止め、私は静かにジッと息を潜めてベンガルタイガーが現れるのを待っていた。

密林と言っても落葉した木立に囲まれた明るい場所で、冬の朝の光がそこ此処に射し込んでいる。木立の間から見える池の水面には、冷気が触れて白い霧が微かに立ち昇っていた。この池にベンガルタイガーが良く来るのだ。

突然、近くの木立に止まっていたカラスが騒ぎ始めた。現れたか？ガイドが池の対岸を指さして“Tiger”と囁く。カメラを向けると、逆光の中に輪郭を金色に輝やかせた黄と黒の縦縞模様が動いていた！

音もなく現れたこの密林の王者に、私は野生への強い畏敬と震えるほどの感動を覚えた。

(インド・ラジャスタン州ランタンボール国立公園にて。1990年12月)

▶ ランタンボール国立公園について

ランタンボール国立公園は約400km²の広さが有り、元々領主の狩猟地でした。今でもその別邸や城砦の跡が残っています。此处で絶滅寸前だったベンガルタイガーを自然の中で増やすために“Tiger Project”と呼ばれる活動が進められていました。

当時この保護区に生息しているタイガーは40数頭とされていましたが、密猟のために実態はもっと少なかったようです^注)。そのため腕の良いガイドを雇ってレンジャーからも情報提供して貰い、広い保護区の中をジープを駆って何日も探し廻りました。

相対的に雄は少なく雌を見る機会の方が多かったです。雌はテリトリーを持って獲物の殆どを捕り、雄はテリトリーを持たずに徘徊して雌とペアを組みます。此处はアフリカのサバンナを思わせる地形が多くて明るく見通しが良いので、他の保護区に比べてタイガーの撮影が楽な場所でした。

注：私は撮影中に2回発砲音を聞いていて、ガイドは“Hunting! Poach!”と言っていました。実際1992年末に密猟が発覚し、調査した所タイガーは10数頭しか居ませんでしたので、その後数年間国立公園は閉鎖されレンジャー武装化等の処置も取られました。

●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります

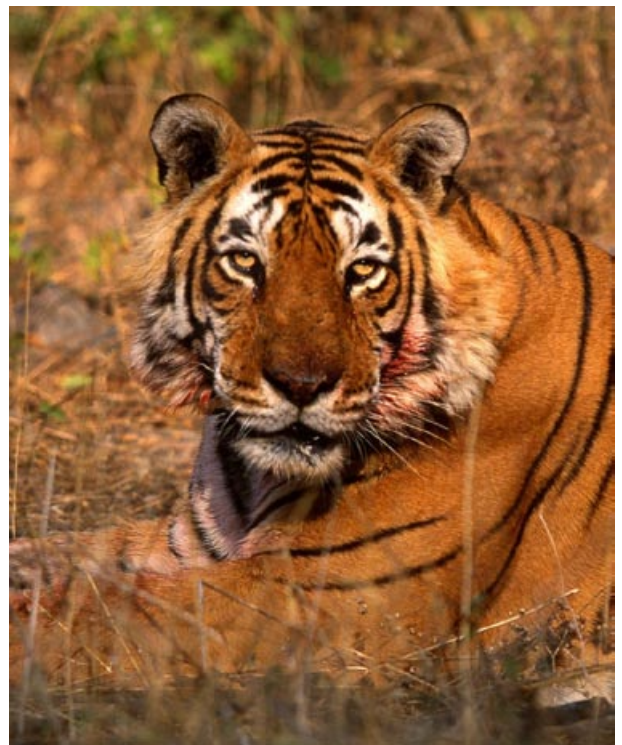
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>

●大川さんのホームページはこちら

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>

<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>



口の周りが赤く見えるのは、捕らえた野性のサンバー（水鹿）を食べていたため。



今回は、前回に紹介したシーギリヤに因んでTank(貯水池)のちょっと真面目な話をします。

アヌラダプーラの王である父を殺した長男のガーシャパは追われる様にしてアヌラダプーラを離れ、シーギリヤに新しい都を築きました。父を殺した理由は、王位継承権を巡る親子間、異母兄弟間の確執でした。ガーシャパは王位を譲るように父を脅し、全ての財宝を差し出すように要求しましたが、父は自ら建設した貯水池にガーシャパを連れて行き、譲る事のできる財産はこの貯水池だけだと話しました。これに怒ったガーシャパは父を殺してしまったと伝えられています。

この王位継承権をめぐる歴史上の話も、インドに追われた弟が復讐のために密かに帰国してシーギリヤを攻め落とすという興味深い話なのですが、興味をお持ちの方にはスリランカの歴史書やガイドブックなどを読んで頂く事として、今回の本題は歴代の王が各地に築いたTANKについてです。

スリランカの地図を眺めていると、北部地域には多くの湖があることに気が付きます。湖の名称を読んでいると〇〇Tankとか〇〇Reservoir、〇〇Wewa(シンハラ語で水のある場所の意味)と書かれていて、いずれも貯水池を意味します。スリランカは北海道の80%ほどの広さしかないにも拘わらず、それぞれの湖は、地図上でもはっきりと存在が判るだけの面積を持っています。例えば、日本地図を見ると琵琶湖や霞ヶ浦が存在感を感じさせるのと同じです。

スリランカ北部には、天然の湖が出来るような山岳地帯は有りません、乾燥した平地が広がっているだけです。地図上で見られる湖の多くは遷都の度に歴代の王によって建設された灌漑と飲料水の為の人口の貯水池です。古いものは紀元前に建設されたもので、スリランカ最古の都として栄えたアヌラダプーラ(2500年以上前から1400年間)に渡ってには多くの貯水池が残されています。シーギリヤの様に、一時的にアヌラダプーラから都を移した王も新しい土地で最初に行うのは寺院と貯水池の建設でした。

文化の三角地帯の遺跡群を旅すると、キャンディを除いたどこの遺跡の傍には広大な貯水池があります。キャンディはインドから追い詰められて高原地帯に造られた最後の都なので、広大な貯水池を作れる様な平地が無かった為と思われる。

貯水池があるのは北部だけではなくありません。南部のテイッサマハラマには、紀元前3世紀頃にアヌラダプー

ラから避難してきた王によって築かれたと伝えられている王朝が残した貯水池が伝説と共に残されています。

何故このような貯水池を各地に造ったかといえば、スリランカは紀元前から現在に至るまで米作を中心とした農業国家である事が考えられます。現在では、海外の出稼ぎ者からの送金が外貨獲得のトップになっていますが、つい最近まで米輸出は、外貨獲得のトップバッターでした。米作を拡大して自らの勢力を強める為には、水の確保が最優先事項でした。歴代の王は、王位を継承する度に農民達に自らの権力を示すためにも、新しい貯水池を建設する必要がありました。

驚かされるのは、紀元前の物も含めて各王朝の時代に建設された貯水池と、これに付随する灌漑用水路、飲料水の配水網、下水施設などが手入れを繰り返して現在でも利用されている事です。もちろん、スリランカ人の大好きな水浴にも使われています。

僕は建設会社の職員としてスリランカに駐在していたので、これらの貯水池や付帯施設の改修工事に参加する機会が多くありました。工事を始める前には必ず、現状調査を行うのですが、現在でも利用されている事だけでなく、建設された当時の技術の高さにも驚かされます。

現在の様な重機械が無い時代に、どの様にして止水し、高い堤や排出口を構築したのか、どの様にして設計・測量したのか、人海戦術で工事をしたならどのくらいの人数と時間、費用が掛かったのだろうか、同僚と首を捻るばかりでした。

勿論、僕たちは貯水池の改修ばかりしていたわけではありません。現代の貯水池とも言えるダム建設にも参加したので、ダムの背後に広がるダム湖がスリランカの地図上ではっきりと見る事ができます。ひところ流行った地図に残る仕事という奴ですね。

貯水池は観光客にとっても素晴らしい場所です。遺跡を訪れた観光客は見物に疲れたら貯水池の傍に立って、その貯水池を築いた王のように、水面を渡ってくる風を身体に感じながら、その日の出来事を振り返る事が出来ます。

そして対岸には昔と同じジャングル、遠くの小高い丘の頂上に太陽の光で輝いている小さな白い仏舎利塔があるのに気が付くことでしょう。スリランカに行く機会がありましたら、是非とも貯水池にも足を運んで、貯水池を渡る風に吹かれながら古の王や当時の事に想いを馳せてみて下さい。

昨年(2007年)9月から中国遼寧省大連市にある日本語専門学校に日本語教師として赴任して、約1年が過ぎた。

最初の数か月は毎日の生活に慣れることに精一杯で、本来の日本語を如何にまた何を教えるかということについては、あまり考える余裕がなかった。その後徐々に日常生活に慣れるにつれて、学校、学生や先生方、大連のこと、食習慣などだんだんわかるようになり、より見えるようになってきた。それとともに日本語教授に関する方法や教材なども中国の学生に合うように徐々に工夫を凝らすこともできるようになってきた。そんな風にあれこれしているうちに、やっと慣れたと思った時はもう1年が終わりかけ、帰国する時になってしまった。1年間ではたいしたことは何もできないと今更ながらに気がついた。しかし、短い期間ではあったが、日本語を教えるだけでなく、私にとっては多くの中国人の友人、知人を得ることができ、貴重な体験をすることができたと言ってもいいだろう。

中国では日本語は大変人気があり、学習人口は英語に次いで2番目に多い。しかし、遼寧省は他の省に比べると、日本語学習人数が1番多いそうである。その理由として戦前から日本語になじんできたので、その影響で学習する人が多いという話を聞いた。私の教えた学校は3年制で、2年になると毎年12月に行われる「日本語能力試験」の3級を受験し、3年になると2級を受けることになっている。

ところが、3級の受験料は300元を超え、昨年に比べるとかなり値上げされ、受験する学生にとってはかなりの負担のようだ。この能力試験とともにもうひとつ大事な統一試験が年に数回あり、これは遼寧省だけのものがある。この試験ではある一定以上の点数を取らなければならない。

大連といえば、年配の方々には戦前の、かつての植民地としての大連をご存じの方も多し。よく年配の方々が見学旅行で大連を訪れ、自分たちが住んでいたところを訪ねたり、日本と関わりのあったところを見て回っているのをよく目にした。特に、日露戦争の戦跡を見て回るツアーに人気がある。私も1度旅順を訪ねたことがある。大連は他の都市と比べると、日本関係の戦前の建物がかなりたくさん残っていて、それらは人気のある観光名所になっている。

私にとっては戦前の日本との関わりよりは、「アカシアの大連」のイメージが強く、大連といえば真っ先にアカシアが思い浮かぶほど、この花に興味があった。長い間一体どんな花なのか、ぜひともこの花を見てみたいと思っていた。毎年5月の最後の週にアカシア祭りがあり、今回やっとこの花を見ることができた。市内のあちこち

にアカシアの木が植えられていて、その美しい花が咲き誇っていた。

しかし、この花は公害に弱いことや手入れが大変だといった理由で、今では市内の限られたところでしか目にするることができない。この花には白とピンクの2色あり、いずれも何とも言えない芳醇な香りがした。市内のスーパーにはアカシアから作られた蜂蜜やワインが売られていて、試しに両方買って見たが、なかなかアカシアの素晴らしい香りがして、日本に持って帰りたいと思った程であった。

アカシア祭りには、ちょうど祭りに合わせて日本から東京新宿にある歌声喫茶「ともしび」の常連客で作られた訪問団が大連を訪れ、私たち滞日日本人との歌声交流会を開催し、私も友人とともに参加することができた。大きな声で日本やロシアそして中国の歌を参加者とともに歌い、久しぶりに日本の雰囲気になり、何ともいえない楽しい気分を味わう機会を得ることができた。

春は4月中旬になってやっと本格的に始まるが、5月になるといろいろな花が咲いて一番良い時期である。驚いたのは、大連にはあちこちで桜の花がたくさん咲いていて、5月になると各地で花見が行われることであった。実際に桜の花を見ることができた。

何といっても冬が一番つらい季節である。10月末には冬が到来し、4月初めまで続く。12月と1月が一番寒さが厳しい。気温はマイナス15度位までになり、外に出ると寒だけでなく風がものすごく強く、厚いコート、帽子、手袋の3つが必要である。これまでこのような寒さを経験したことがなかったので、あまり外出するのにもまならなかった。しかし、地元の人々は寒さをものとせず、大勢の人々が買い物や遊びに外を歩いているのには驚かされた。

長い冬の後には春が短い。しかも、春とは言っても、毎日はっきりしないどんよりとした日が続く、晴れた日はそう多くない。その春が終わると、待ち焦がれていた夏がやってくる。大連は周囲を海に囲まれているために、海水浴場が何か所もあり、戦前からの海水浴場(「星ヶ浦」という名前であった)が今でも有名な海水浴場として多くの人々が訪れている。6月下旬になると、気温が30度を越え、一気に夏になる。そうなるると多くの人々が大連にやってくる。

気候の変化が強く、冬の気候が大変厳しい大連であるが、私はこのような大連が大変気に入った。食べ物北京などとそんなに違いはない。中国人にとっても住んでみたいと思う人気のある都市だそうだが、私もできればもう一度住んでみたいと思う。紀行風土だけでなく、ここに住んでいる人々はとても優しく、私にとって親しみを覚える多くの友人ができた。1年間を振り返ってみて、しみじみそう思うこの頃である。(終わり)

風景を懐かしみながら歩いていると、見覚えのある小さな広場のような場所に出た。あ！ここは以前馬で訪れた時に休憩を取った場所だあ！！

慣れない乗馬でおしりをさすりながら、みんなで草の上に腰掛けおやつを食べたり水を飲んだりした事を思い出す。私たちが休憩していた広場から道を挟んだ向かい側にはマニ塚が立てられ、チベットの経文が書き込まれた色とりどりの布が万国旗のように連なるタルチョがぐるぐると巻きつけてあった。道の下には素晴らしく美しい湿原が広がり、湿原から流れ出る小川に小さな石積みの橋がかかけられている。橋の回りにも向こう岸にも沢山のタルチョが巻きつけられているのが、そこが何か特別な場所であるのを感じさせていた。

ああ、橋の向こうに何かあるのか見に行ってみたいなあ・・・あの時の私は、団体旅行で好き勝手な行動が許されない我が身を口惜しく思いながら向こう岸を眺めていた。今回は誰にも気兼ねなく好きなだけ道草を食べる一人旅だ。今度こそ帰るまでにこの奥に何かあるのか見届けに行かなくっちゃ！！

喜びに胸を膨らませ思い出に浸っていると、一行は道をそれて橋を渡った。

「え？こっち！・・・此処に何かあるの？」

私の問いに誰かが答えた。

「沖古寺だよ」

え～!? チョンクーズって、ここの事だったのかあ～!

そうなのである。前回は何も考えず人について行っただけの私は、亜丁の地理について全く把握していなかった。みんなと会話しながらも、「チョンクーズ」というカタカナでしか思い浮かばない地名がお寺を表していたとは、ここに来るまで気付かなかったのだ。

そうと知っていたら、何か宗教的な意味のある土地に違いないこの場所とのつながりに気付くことも出来たかもしれないのに。

「なんだよお～。たった此処までで30元かあ・・・」

亜丁の入り口を出発してからまだいくらか歩いていない。私がこの日目指したかった洛絨牛場までは、まだかなりの距離が残っている筈だが、ポーター少年との契約は此処までの約束だ。

これからどうしよう・・・自分の大荷物を考えて、私は戸惑ってしまった。

小さな橋を渡って少し坂道を登るとお寺の屋根のようなものが見えていたが、私たちが入っていったのは粗末な小屋がいく棟か建てられている宿泊所の中庭だった。

そういえば亜丁では洛絨牛場の他にもお寺にも泊まれる場所があると、あの時、烏里氏に聞いた覚えがある。以前はお寺の本堂に泊めてもらっていたらしいが、観光客が増加したため此処にも宿泊施設を作ったのだろう。

中庭に置いてあるテーブルの上に荷物を下ろし、少年に30元渡した。先程の一件以来無口になってしまった少年は、お金を受け取ると黙って立ち去っていった。

気立ての良さそうな可愛い子だったのにな。あんな事さえなければ、もっと仲良くなっていたのかもしれないに・・・。

宿の前では中国人の学生と見られる若者グループが出かけようとしている所だった。

すかさずアーロンが話しかける。

「你好！君たち今日はここに泊まるのかい？宿代はいくら？」

彼らは男女7人で広東省からやって来たという学生のグループで、部屋は一人40元との話だ。

「うわ、これで40元？高え～・・・」

アーロンが顔を曇らせる。

確かに掘っ立て小屋としか言いようのない目の前の小屋と比べれば、昨夜泊まった稻城の温泉は此処よりずっと上等な宿であったが、宿代は20元だ。これも観光地価格ということなのだろう。

新たな客かと表に出てきた、宿の女将が強欲そうな顔つきで言った。

「亜丁にはここしか宿は無いわよ。亜丁に滞在したきゃ、ウチに泊まるのね」

「洛絨牛場は!? あそこにも宿泊施設があるでしょう？」と私。

おかみは首を振りながら答える。

「牛場の宿はシーズンが終って一週間前に閉めたわよ。営業してるのはウチだけよ」

「本当!? それは確かなの!？」思い出のある洛絨牛場に泊まる事にこだわっていた私は、諦め切れずに女将に何度も問い直した。

「ウチだけよ。ウチに泊まりなさい」

その時、後ろにいたシャオチンがそっと私の服の袖を引き、小さい声で囁いた。

「あんまり信じない方がいいわ。自分の宿に泊まらせようと嘘をついているのかも知れない」

確かにこの女将だったら、そんな事もありそうな雰囲気なのだ。

う～ん・・・私は迷ってしまった。

牛場には泊まりたいが、大荷物をどうやってあそこまで運ぶのだ。それに洛絨牛場まで行って本当に泊まる場所が無かったら・・・

そんな時だった。誰かの叫び声で目を上げると、それまで雲に包まれていた小屋のすぐ後ろの空に、天を突き上げるような雪山が雲の切れ目から頭を覗かせていた。亜丁三大神山の最高峰、仙乃日(シェンナイリー)だ。

「おお～っ!! 神がお姿を現したぞ!! みんな祈れ～っ!!」アーロンが下げさな叫び声を上げ、それにつられたウィンと共にその場で猛烈に五体投地を始めた。祈りというよりは殆ど体操だ。私が声をあげて笑うと、

「恥ずかしいからやめてよ、もう」シャオチンが口元を歪めて苦笑した。

残念ながら二人の激しい祈りは天まで届かなかったのか、神はすぐに再び厚い雲の中に姿を隠してしまわれたが、もし雲ひとつない時にこの場所にいたら、どれ程素晴らしい眺めなのだろう。

お祈りがすんで、シャオチンと話していたアーロンが言った。

「俺達は亜丁に泊まるのは辞めとくよ。ここは物価が高すぎるぜ。今日一日、亜丁で過ごして夕方稻城に戻ることにするよ」

私は心変わりしたアーロンの気持ちが少し解るような気がした。素朴な自然や人々を愛する彼は、こんな奥地にありながら相当観光ずれしていると感じられる土地の雰囲気、早くも違和感を覚えているのだろう。「旅行者なんだから金を出せよ」とばかりに足元を見たような態度で迫ってくる村人達の思惑にはまるのは嫌なのだ。

「でも、亜丁にはすごく綺麗な湖があるんだよ! 泊まらなきゃ見に行く事が出来ないけど、本当にすごく綺麗なんだよ～!!」と、私。

「いや、湖なら俺達はあちこちで沢山見てるから、もういいよ」

・・・でも、でも、あの湖は、そんな他の場所の湖とは全然違うのに～!! 自然を深く愛するアーロンだからこそ、私はぜひともあの湖を見せたかったのだ。

気の合う旅仲間としてアーロンとシャオチンがかなり気に入っていた私は、彼らが同行しないと決まって少なからずガッカリしたが、出会いと別れは旅の日常だ。所詮は行きずりの旅人同士なのだ。限られた旅の時間を何処でどう過ごすかは各人の自由で、私がここで彼らを無理に引き止める事は出来ないのだった。

「元子、君はどうするつもりだい?」

うーん・・・どうしよう

・・・私が亜丁に滞在する時間はまだ十分にある。しんどい思いをして大荷物を運び、路頭に迷うリスクをおかし

てまで牛場に行かなくても、今日のところはここに荷を降ろし、改めて軽装で様子を見に行けばいいんじゃないの? 宿泊の可否を確認してから牛場に宿を移したって遅くはないだろう。

今日この宿に泊まっている学生グループも感じのよい若者達だし、色々迷うのが面倒になってきた私はこのまま沖古寺に泊まることに少しばかり心が傾きつつあった。

「ところで、あなた達はこれから何処に行くの?」とりあえず決断を先延ばしにして、その場にいた学生達に尋ねると、「珍珠海を見に行くんだ」と宿の裏山の方向を指差した。

中国では池や湖を総称して海子と呼ぶ。日本語で「～池」や「～湖」などと呼ぶところは「～海」と表現するのだ。

「え!? こっちにも海子があるの～!?」

私は即座に宝石の湖を思い浮かべた。あんな綺麗な湖がこちら側にもあるの!? これでほぼ私の心は決まってしまった。

「私も珍珠海を見に行きたい!! ねえ、一緒に行かない?」声をかけると、アーロンは首を振りながら答えた。

「元子は海子が好きだなあ。俺達は時間がないから遠慮するよ」

「そうかあ～・・・じゃあ、私は彼らと海子を見に行くことにしようかな」

振り返ると宿の女将に言った。

「ねえ、海子を見に行く間ここに荷物を置かせてくれる?」

おかみは黙ったまま胸の前でパッと片手を開いて見せた。

「は?」

「5元」

「はあ～!? ほんのしばらく荷物を置かしてもらっただけなのに、お金取るの!?」

口元に皮肉な笑みを浮かべて女将が言った。

「5元よ」

それまで懸命に抑えていた何かが、私の中でプツンと切れた。

「もういいよ!! 荷物は預けないわ! 珍珠海も行かない! 自分で背負って牛場まで行くよ!!」

私は女将に背を向けると勢いに任せてテーブルの上に置いてあった大きなザックを背中に背負い、それまで背負っていたハイキング用ザックを胸側に抱くように肩にかけた。

「さあ、行こ!!」

まるで荷物に埋もれたような私の姿をみんなは戸惑ったような顔で眺めていたが、完全に怒っていた私はさほど重さは感じなかった。

「レッツ・ゴー!!!」怒りに任せて大声を出し、先頭を切つて歩き出すと空に向かってこぶしを振り上げた。

(次号に続く)

韓国人旅行団20人ばかりのバスに日本人のおばさん2人は紛れ込み、うねうねと急坂と急カーブに身を任せて五女山山城へ登って行く。見上げると黒々とした森を掻き分けて一際高い、平たい頂上の山がその“五女山山城”と言う。

韓国ドラマ「^{チュモン}朱蒙」の主人公・朱蒙がB.C.37年に建国した高句麗の最初の城(都)へ、このバスの乗客は行こうとしているのだ。ここは中国、東北部遼寧省瀋陽からワゴン車をチャーターして4時間、深い山に囲まれた農村^{カンジン}桓仁県。長い研究課題であった建国の地はどこか・・・近年になって、ここ遼寧省桓仁県^{コンコウ ソツボンガワ}渾江(卒本川)流域の五女山山城がその地であったとガイドブックは言う。20分程登った所でバスが停車した。自然石に「国家地質公園」と赤く記された景勝地、平たい頂上の山をバックに旅行団の記念撮影が始まった。友人Eと私も彼らをかメラに収め、再びバスの乗客となった。さらに10分ほど登り、バスの発着所に到着。そこから999の石段が私たちを待っていた。

屈強な男ならぬ、痩せた父親とその息子とおぼしき2人に「駕籠に乗らないか」と誘われ、迷うことなく私は乗った。2本の丸木を平行に並べ、その間に足置き横木を渡し、お尻をスッポリ入れる布を張っただけの簡単な駕籠だ。Eは自らの足でどんどん登っていく。日ごろの山登りで体力を作っているのか、細い身体に似あわぬ健脚ぶり。

先ほどの韓国人旅行団の一人がEとなにやら談笑しながら一步一步登っていく。頼りない駕籠かきの若い兄ちゃんは、やはり途中で血圧でも下がったのか私を抱えたまま激しい嘔吐をした。私は慌てて駕籠からおりと「大丈夫！」と連呼し、後ろを受け持つ父親は知らん顔している・・・。

はらはら心配しながら30分も上っただろうか・・・頂上に到着。Eはとっくに着いていて私を待っていた。木っ端に書かれた道標を指差しながら更に木製階段を上りながら見晴らしの良い場所へと案内してくれた。平たい山頂のどこに当たるのか理解できるはずもなく、遥か眼下を見渡せば山深く、川遠く、青空は高く・・・^{フヨ}扶余から脱出し、大国、漢に反旗を翻した朱蒙たちの彼らの最初の城(都)は、かくも攻められにくい天上に作ったのかと感心することしきり。

高句麗、朱蒙が建国したその国は扶余(現、吉林省長春市の北、農安県あたり)の民族^{フイバク}“穢貊”諸族と云われている。

高句麗を建国するに至った大きな理由は、中国の東

北進出にあった。紀元前108年、前漢の武帝は朝鮮半島に討伐軍を出兵し衛氏朝鮮を平定。征服地に^{ラクロウグン}楽浪郡・^{ゲントグン}玄菟郡・^{ソウカイグン}蒼海郡・^{リントグン}臨屯郡の四郡を設置、支配管理した。亡国の民はあるいは流浪し、あるいは奴隷となって前漢の都・長安へ連れ去られた。朱蒙らの反漢への思いはつづき流民と共に建国へとつながるのだ。(以下、韓国ドラマを旅する②/2007年7月号125号に詳しいので割愛する)

2004年、ユネスコの世界文化遺産に指定された中の一つにこの“五女山山城”遺跡もあるのだ。この平たい頂上のあちこちに、大型建造物の跡、兵営跡、歩哨所跡、貯水池、瞭望台等等、居住宮殿の跡には礎石が整然と並び往時を物語っている。標高806メートルのこの五女山には天然の城壁と人口の城門がある。山城の南門からは馬が急を告げたり、兵が走ったのか道幅が4メートルもある。しかし、城壁と馬道の右側は断崖絶壁なのだ。東門、西門も二重三重の城壁に囲まれ工夫を凝らしている。出土物には、高句麗独特の鉄矛、鉄甲衣、鉄鏃他生活用具、生産用具、馬車用具、兵器、刑具等々鉄器の数が多し。

現在、朱蒙の墓石(古墳)の所在は不明。高句麗独特の城の造り(山城と平城をコンビで作る)のうち平城は特定されていない。この山城の築城方法は、渤海、遼、金、後金、そして日本へと伝播していった。中国・朝鮮・韓国の城は城壁の中に一般庶民が住む。いざ城が攻められる戦ともなれば庶民も武器を持ち参戦する。中国の古都を旅すれば、碁盤の目の通りを大きく囲む城壁が残っている。中国語で「進城」は「街に行く」の意味という。城壁で囲まれた中に入る、という感覚が今にして理解できた。

日本の城は石垣の外に濠をめぐらし、さらにその外に城下町を形成する。日本の庶民は戦の時は荷車に荷物を積んで逃げたのだろうか・・・。

999段の石段を再び例の駕籠に揺られて降りた。代金は登りの半額、所要時間は3分の1。貧相な若者は、元氣を取り戻したか、顔色もよくなっていた。このスピードに付いていくEの健脚に脱帽。

さて、中国人研究者によると紀元3年頃、高句麗2代目瑠璃王の時代に国内城(現、吉林省集安市)に遷都(日本人研究者は紀元3世紀に遷都)したというが、この桓仁県にある古墳群の中に東明聖王(朱蒙)の墓があるのだろうか。農家の畑の中に丸い小石を積んだ積石塚と呼ばれる小高い古墳の数々、「上古城古墳群」と石に刻まれているが打ち捨てられた感が否めない。それともこれから“世

界遺産”にふさわしく整備、発掘し観光の目玉にするのだろうか・・・。

高句麗の遺跡は中国東北部、北朝鮮、韓国と3つの国にある。中国側の主張は東北部に跳梁跋扈する一少数民族の興亡ととらえているが、韓国・朝鮮人にとって北国の雄“高句麗”は誇り高き自分たちのルーツなのだ。

国の思惑とは別に、遙か昔の彼らは、高い文化と技術、そして歴史の謎を人類への遺産として私たちに与えてくれる。素人の私たちがこんなにわくわくするのだから、研究者にとって歴史をひとつひとつ解明していく事は苦しみと同時に喜びなのだろう・・・等と思いながら、車窓から遠ざかる五女山山城に別れを告げた。私とEは瀋陽でチャーターした姚さんの運転するワゴン車に揺られ、葡萄畑を道の両側に見ながら、通化を経由して次の目的地吉林省集安へ向かったのだった。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついでに折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

chángjiāng zhī gē 長江之歌

王世光・曲 胡宏伟・詞

nǐ cóng xuěshān zǒu lái
你从雪山走来，
chūncháo shì nǐ de fēngcǎi
春潮是你的丰采
nǐ xiàng dōnghǎi bēn/bèn qù
你向东海奔去，
jīng tāo shì nǐ de qìgài
惊涛是你的气概，
nǐ yòng gāntián de rǔzhī
你用甘甜的乳汁，
bǔyù gè zú ér nǚ
哺育各族儿女，
nǐ yòng jiànmei de bìbǎng
你用健美的臂膀，
wǎn qǐ gāoshān dàhǎi
挽起高山大海。
wǒmen zànmei chángjiāng
我们赞美长江，
nǐ shì wúqióng de yuánquán
你是无穷的源泉，
wǒmen yīliàn chángjiāng
我们依恋长江，
nǐ yǒu mǔqīn de qíng huái
你有母亲的情怀，
a , chángjiāng , a , chángjiāng
啊，长江，啊，长江。

それは雪山より流れ来る、春の奔流はその力、
それは東海へと向う、逆巻く波はその気概
それは甘い乳で、民族の子を育む
それは逞しい腕で、高山大海を支える
我等は長江を讃える、それは尽きない源泉、
我等は長江を慕う、それは母の暖かい懐、ああ長江よ。

中国を読む(57)

『フォト・ジャーナリストの眼』

長倉洋海著(岩波新書)



長倉洋氏の講演会に出かけたことがある。日焼けした顔を覆う髭に笑顔がとてもよく似合う方で、充実して生きている人の匂いがした。

充実して生きてないわけがない。このフォト・ジャーナリストはタダモノではないのだ。

ある時は、外国人労働者の写真を撮るために日本でフィリピン人になりすまし(!)、またある時は

ダリ語(ペルシャ語方言)を武器にイスラム戦士の懐に飛び込む。すべては「いい写真を撮りたい」という一心から。「いい写真」とは、必ずしも刺激的な写真ではなく、「人間の心を奥深く揺り動かすような写真」だという。

「いい写真」を撮るために、戦場で、アフガニスタンで、フィリピンで、そして日本でカメラを構える。カメラの先には、笑顔の子どもが、英雄が、子どもを亡く

した親が、労働者がいる。被写体の一人ひとりに、そのシーンひとつひとつにドラマがある。そのドラマに出会い、それを映し出すには、カメラを構えるその人自身が、彼らと共鳴し、彼らを理解し、そこに社会性を見出さなければならない。カメラのこちら側とあちら側に分かれる者同士でありながら、著者はカメラの向こう側の世界を受け止め、一枚一枚と向き合っているのだと思う。

「右目でファインダーをのぞいて、左目はファインダーに映らない周りにまで気を配れ」という先輩の言葉に著者は忠実に従ってきた。技術だけではない深い意味がそこには込められている。どんなセンセーショナルな事件でも、「事実」のみを捉えた写真は現場報告に過ぎない。大切なのは、起きた事実そのものではなく、なぜ起きてしまったのか、その背景、またそれを生み出す社会の構造なのだと言っている。

そして、それはわたしたちにも必要な視点だったりする。ニュースの出来事は、どこかの誰かがしてしまったこと、ではなく、自分自身もその事件が起きる社会の一人として存在するわけで、その視点を持つ責任は生じるのだ。私自身は、その責任を果たしている自信はまったくないけれど・・・

真中智子

中国山西省・老陳酢料理交流会 参加者：10名

2008年11月9日(日) 9:30～14:00

於：三輪センター 料理指導：何媛媛さん

▶ **目からうろこの黒酢料理** ◀

山西省の特産品に高粱、大麦などの雑穀を主な原料とした黒酢(老陳酢)がある。香りがよく、うま味があり、おまけに米が原料の黒酢と比べてアミノ酸が豊富で、山西省の人たちは古くから調味料としてばかりでなく健康飲料としても大いに重宝していると聞いた。最近、この老陳酢を日本のスーパーでも見かけるようになり、山西省出身の何媛媛さんにこの黒酢を使った家庭料理を教えていただくことになった。

予定のメニューを見ると全部で6種の料理、そのすべてに黒酢が使われる。部屋中に酢の匂いが充ち、味が単調になるのではないかと少々心配になった。調理が始まり、使われる黒酢の量を見て驚いた。こんなに入れるなんて、さぞ酸っぱくなるだろう。そして、出来上がった料理を口にしてまた驚いた。殆ど酸味を感じることなく、黒酢のうま味と香りがそれぞれの食材の味とうまく調和している。玉ねぎの炒め物、ジャガイモとピーマンの炒め物、茄子の蒸し物、などなど。素材は単純で、作り方も簡単。それなのに本当に美味しい。6種全部を食べて、アミノ酸をたくさん体内に取り入れ、健康食を頂いたという感じにもなり、老陳酢の底力にすっかり「御見せしました」と感服するばかりとなった。(報告者：岩田温子)

試してみませんか、何媛媛さんから届いた、美容と健康のための黒酢の妙用

1. ピーナッツ10粒を、夜寝る前に適量の黒酢に浸し、翌朝、お酢を呑みピーナッツを食べます。高血圧に有効です。
2. 大豆を3倍くらいのお酢に4日間浸し、5日目から毎日、～10粒を食べます。便秘と高血圧に効きます。冷蔵庫に入れると長く保存できます。
3. 風邪を引いた感じをしたとき、20mLのお酢を、5、6倍の水で割り、口をすすぐと予防できます。
4. 窓や入り口を締め切って、鍋に60～90mLのお酢を水で2倍に薄めて加熱します。沸騰したら弱火にしてお酢の蒸気を部屋中に行き渡らせます。この蒸気は殺菌効果があります。
5. お風呂のお湯に30mLくらいのお酢を入れて入浴すると疲れが取れます。
6. 夜寝る前に、水1カップにお酢を大匙1を混ぜて飲むとよく眠れます。
7. バナナ1本、赤砂糖100g、酢200gを用意、バナナは1～2cmに切り、赤砂糖と酢を入れて、レンジで30～40秒加熱。砂糖が溶けたら、冷蔵庫などに入れて保存。これを食べるとダイエットと美肌効果があります



🌸【チャレンジしてみよう!】

健康と美容の老陳酢(山西黒酢)料理・3種

(11月9日のレシピから) *他の料理は'わんりい'HP掲載

◆ **糖醋咕嚕肉** (タンツウグルウロウ)

▶ **材料(4人分)**

肩ロース300g、ピーマン1個、卵1個、玉ねぎ半個、パプリカ・赤と黄各半個、ニンニク、サラダ油、黒酢、片栗粉、トマトケチャップ、砂糖、葱、生姜、料理酒

▶ **作り方:**

- ①肉を一口大に切る。
- ②塩、酒、卵、片栗水を加え、10分ほど置く。
- ③ピーマン、玉ねぎは乱切り、ニンニク、葱、生姜は微塵切。
- ④油を170～180℃に熱し、①に片栗粉をまぶして、1個ずつ狐色に揚げる。
- ⑤鍋に油大さじ1杯を熱し、ニンニク、葱、生姜を入れて香り出しをする。
- ⑥⑤の鍋にピーマン、パプリカ、玉ねぎを加えて炒める。
- ⑦⑥の鍋に黒酢大匙2、砂糖大匙1、トマトケチャップ大匙1を加え、更に片栗水を加えて、④の肉を入れ鍋のソースとよく混ぜ合わせる。

◆ **炒土豆絲** (チャオトゥドウスー)

▶ **材料(4人分)**

ジャガイモ2個、ピーマン1個、サラダ油、塩、黒酢、味の素、葱花(みじん切りの葱)

▶ **作り方:**

- ①ジャガイモとピーマンを細切にし、水に放って澱粉を流す。
- ②油を中火熱し、煙が立ち始めたら葱花を入れ、ジャガイ

モとピーマンを加え、強火で二分間炒める。

- ③②の鍋に、黒酢、塩を加え、最後に味の素を少々を加える。

◆ **醋蒜茄子** (ツウスワンチェズ)

▶ **材料(4人分)**

長ナス2個、ニンニク、山椒少々、黒酢、塩、万能葱

▶ **作り方:**

- ①ナスを薄く輪切りにする。
- ②万能葱、ニンニクを微塵に切って置く。
- ③ナスをお皿に並べ、蒸器で15分ほど蒸す。
- ④ナスが柔らかくなったら、皿を鍋から出して黒酢を掛け、ニンニク微塵切りと塩少々を振る。
- ⑤別鍋に山椒と油少々を中火で暖め、山椒が黒くなったら、山椒を取り除き④に掛けて万能葱の花を散らす。

【参考】 **カラスムギ(燕麦)の麺**

- ①粉をボールに取り熱湯を掛けて、耳たぶほどの柔らかさに捏ねる。
- ②①(銀杏ほどの量)を手にとって「魚魚」(魚に似せた紡錘状に成形したもの)を成形する。
- ③②の「魚魚」を蒸器に並らべて、15分間蒸す。
- ④「魚魚」に掛け汁を掛けて食べます。

日本でも見かけることのできる雑草ですが、ヨーロッパなどではオートミールなどにして古くから食べられてきました。栽培種を「燕麦」ともいい喉越しのいい麺の材料になります。



【'わんりい'活動報告2】

町田発国際ボランティア祭・2008夢広場「この星に平和と希望を！」(主催：2008夢広場実行委員会)に参加しました 2008年11月2日(日) 10:00～16:00 於：ぽっぽ町田・イベント広場 天気：快晴

国際支援と友好活動をしている町田市周辺のボランティア団体が集結、エスニック料理いっぱい！民族芸能いっぱい！そして、エスニックグッズもいっぱいの恒例のお祭りで、お天気にも恵まれ賑やかに楽しく盛会で終了。

'わんりい'は例年と同じく、遊牧民風味の炭火焼焼鶏で出店。600本用意の焼串は13:30には販売終了。とはいえ、自分たちで食べたり、ご馳走したり、お土産にしたりで実質販売は500本くらいかも。諸物価高騰で、実質的収益は？でしたが参加することに意義ありのお祭を楽しみました。

早朝から終了まで、ご参加くださった皆様、お疲れ様でした。また、もうもうの煙を浴びせた両隣のブース様、ご迷惑をお掛けしました。世界も、このお祭の出店団体の皆様のように、寛大で穏やかであってほしいものです。



エスニックグッズいっぱいのわか TENT 村
撮影：松本 悟 (国際交流センター)



'わんりい'のブース 撮影：河本義宣



仮設舞台で平和をアピール
撮影：松本 悟 (国際交流センター)

【'わんりい'活動報告3】

まちだ市民大学 HATS/まちだ市民国際学【公開講座】 11月18日(火) 於：町田市民フォーラム 3Fホール
◆「中国の伝統芸能・京劇を知る」 講師：張紹成 ◆「町田での日中文化交流について」 田井光枝

まちだ市民大学【公開講座】に参加して 岡村景孝

京劇についての私の経験は、北京での短期留学中、^{リエンフー}臉譜(隈取り)の面を作ったこと、また四年ほど前、北京の湖広会館で本格的な「霸王別姫」や「孫悟空三打白骨精」の演技をみたことです。霸王が手の動きで虞美人に対する悲嘆の感情を表現しているのが妙に印象に残っています。また、北京・前門の老舍茶館で現地の人たちに混じって京劇の唱を^{チヤン}聴きました。外国人の私には、唱の中味はさっぱりわからず、甲高い節回しをただ聴いているだけでした。その折、小舟に二人が乗って、竿以外はなにもないのに舟の回る動きや舟がゆれるさまの表現が実に見事で、当時はこれは雑技の一つかとも思っていました。

今回のまちだ市民大学 HATS・国際学の公開講座「中国の伝統芸能・京劇を知る」に参加し、これまでの断片的な京劇体験が、初めて体系的な京劇理解にまとまりました。京劇の四功、五法は実演を交えての説明なので良くわかりましたし、

また、役者には生、旦、浄、丑のそれぞれの役柄があり、顔のくま取りなどで見分けられることも少しはわかるようになりました。馬鞭(房のついた馬用の鞭)を役者が持っていれば馬に乗っていること、武将の背中の旗は軍隊を率いていることなど、知識が増えれば京劇の楽しみも増えます。

1時間半の講義で約200年以上の歴史ある京劇を語り尽くすことは出来ないでしょうが、日本の歌舞伎との比較など、機会があればまた聞いてみたいものです。日本で京劇を見るチャンスは増えてきています。今回得た知識をベースに機会を作って、京劇を鑑賞してみたくなりました。

「町田での日中文化交流について」の話では、わんりいの日中友好にける情熱が私どもにも十二分に伝わってきました。日中友好の草の根運動を実施しているつもりの一人としても大きな勇気と励みを与えられました。

中国伝統演劇・京劇鑑賞が何倍も楽しくなる (詳細: チラシ)

京劇わくわく講座

● 参加会費: 1,500円
(全席自由席 188名)

2008年12月12日(金) 18:30 ~ 20:30 (開場: 18:00)

於: 町田市民フォーラム・3Fホール

小田急線町田駅南口徒歩7分・JR横浜線町田駅ターミナル口徒歩3分
<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/com/com14/>

zhāng shào chéng

yīn qiū ruì

◆ 講師: 張紹成 (武生役) & 殷秋瑞 (花臉役)

※武生: 立ち回りを役どころとする二枚目

※花臉: 顔に限取をする豪傑役

● 久美堂本店・2Fで直接、会員券を購入
入できます ☎: 042-725-1330



凛々しく見得を切る張紹成さん

● お問合せと申込み: ☎: 042-734-5100 わんりい

『京劇わくわく講座』(上記案内)の見所

(12月12日(金) 於: 町田市民フォーラム 3Fホール)

11月18日、まちだ市民大学HATS・国際学「公開講座」では、久しぶりに張紹成氏の京劇講座を拝見しました。1時間半という短い時間の中に、京劇鑑賞の要点を分かりやすく盛り込み、最後の虞姫の剣舞は、衣装を纏っていないにもかかわらず、あでやかに舞う虞姫を髣髴させる優雅さでした。

さて、市民大学の公開講座に続きまして、12月12日(金)に『京劇わくわく講座』(「わんりい」主催)を開催します。

共に中国国立京劇院の俳優だった、武生役(立ち回りの二枚目役)の張紹成氏と花臉(隈取をする、豪傑などの役柄)の殷秋瑞氏、お二人の京劇俳優さんが、自らの手で化粧をし、隈取を施し、舞台の上の役柄にどんどん変身してゆく

姿を目の前に見ながら、京劇についての知識を深め、最後は、京劇ならではの華やかな舞台衣装を纏って、三国志の中の一場面、張飛と馬超の勇猛果敢な、一騎打ちの大立ち回りを見せていただきます。

張飛は、ご存知「三国志・桃園の契り」で、関羽と共に劉備と義兄弟の契りを交わし

た、三国志の幕開けから登場し、重さ90斤、長さ1丈8尺の蛇矛を振るい、戦って負けを知らぬといわれた豪傑。その強さは、長坂坡の戦いで、長坂橋の上に仁王立ちになり「我こそ燕人・張飛なり。勝負する奴はおらんのか!」と咆哮しただけで、曹操の数十万の敵を潰走させたといわれています。

片や馬超は、後漢の名将・馬援の末裔で羌族の血を引く猛将。その勇名は、生地である中国・中原地方はもとより、遠く現在の四川省及び甘肅省から青海省にまで轟いていたといわれています。

その馬超が劉備軍に下る前、得意の長槍を振るい張飛と何百回も渡り合う壮絶な一騎打ちを繰り返しました(12月の講座で演じられる場面)。双方勝をゆずらず、劉備は、「あの豪傑をなんとか我が軍に加えたい」と、昼夜を分かたず続いた一騎打ちを中止させ、馬超も、張飛の強さと共に劉備の言動に甚く感動し、ついには劉備下に加わります。

舞台衣装を纏い、京劇の、火を噴くような、しかも優美で華麗な立ち回りが織り込まれた「京劇講座」はこれまでに例がありません。張紹成氏と殷秋瑞氏が、まちだ市民大学・国際学「公開講座」ご参加の皆様、生の京劇の、訓練された動きの素晴らしさを是非知って欲しいとの、心からの願いを込めた特別のプログラムです。

18日の「公開講座」に参加できなかった皆様も、京劇を面白さを知り楽しんで頂けます。お問い合わせをさせていただきます。中国伝統演劇「京劇」を味わって頂けますようにと願っています。

(田井)



張飛に扮する殷秋瑞さん

● 恒例、'わんりい' 新年会「羊肉のしゃぶしゃぶ」で新年を祝おう! 会 2009年2月1日(日) 11:00 ~ 14:00
麻生市民館・料理室 参加会費: 1,500円 対象: 'わんりい' と 'わんりい' 関係者のみ 40名 お早めにお申込みを。

【12月の定例会&おたより発送予定日】 — どなたでもどうぞお出掛けください。

● 定例会: 12月5日(金) 13:30 ~ ● おたより2009年新年号の発送 12月27日(土) 13:30 共に田井宅